

エッセイ 教師と学生を結ぶ

ジェイムズと

フィッツジェラルドの間で

ハンフリー恵子

ヘンリー・ジェイムズと

F・スコット・フィッツジェラルド

一八九三年に大学を卒業した夏目漱石は、一九〇〇年にイギリスに留学する。英語教育を学ぶことが目的であったものの、もともと英文学を学んでいた漱石は、イギリスでもいくつかの英文学の講義を聴講し、多くの文学作品を読み漁った。これほど英文学に精通していた漱石の、アメリカ人作家ヘンリー・ジェイムズに対する評価は辛辣だ。ジェイムズの兄、ウィリアム・ジェイムズの計報に触れた時、漱石は「教授の兄弟にあたるヘンリーは、有名な小説家で、非常に難読な文章を書く男である。ヘンリーは哲学のような小説を書き、ウィリアムは小説のような哲学を書く、と世間でいわれている位ヘンリーは読みづらく、またその位教授は読み易くて明快なのである」と著した。あの文豪をして「難読」で「読みづらい」と言わしめたヘンリー・ジェイムズを、私はなぜゼミ生たちと読もうとしたのだろう。二〇〇七年度、私は三年生ゼミでF・スコット・フィッツジェラルドの『グレート・ギャツビー』を、四年生ゼミではヘンリー・ジェイムズの『デイジー・ミラー』を読むことにした。な

ぜジェイムズとフィッツジェラルドなのか。

実はこの二人の作品を同年度にテキストとして取り上げたのには、いくつかの理由がある。彼らには、文学的に興味深い関係を見ることができののだ。二十世紀のイギリス詩人T・S・エリオットは、一九二五年に『グレート・ギャツビー』が出版されると、友人フィッツジェラルドにそれを絶賛する手紙を書く。そしてその手紙の中で「ヘンリー・ジェイムズ以来、アメリカ文学がようやく第一歩を踏み出し始めたようだ」と述べる。彼らにとってヘンリー・ジェイムズは、人物の「視点」による「意識の流れ」を描くという一つの文学体系を確立した大家であり、だからこそ、そのようなヘンリー・ジェイムズに並び称されたフィッツジェラルドの喜びは、想像するに難くない。「ギャツビーに関連して僕の身に起きた、最高の出来事だ」と彼はエリオットに返信する。

十九世紀を代表する心理主義小説作家ヘンリー・ジェイムズが二十世紀の作家たちに与えた影響は大きい。前述のT・S・エリオットのみならず、一九二〇年代のアメリカを体現するとまで称されたフィッツジェラルドもまた、その例外ではない。ある批評家は、ジェイムズの『アメリカ人』の主人公クリストファー・ニューマンと、『グレート・ギャツビー』のジェイ・ギャツビーとを比較し、両者には共通点がいかに多いかを指摘する。

また、ジェイムズの初期の代表作『デイジー・ミラー』の主人公デイジー・ミラーは、時を経て『グレート・ギャツビー』の中にも姿を変えて登場すると言えよう。自由奔放な振る舞いを決して変えることのないデイジー・ミラーは、ヨーロッパの価値観に染まった者の目には、典型的な新しい国アメリカを象徴する娘と映り、だからこそこの上ない厄介者として扱われる。そして、『グレート・ギャツビー』のデイジー・ブキャナンもまた、一九二〇年代に自由を謳歌しフラッパーと呼ばれた新しい女性たちを映し出していると解され、その軽薄で俗物的な生き方は、語り手ニックに軽蔑されるようになる。少々こじつけのようにも思えるが、

これら「デ이지ー」という名の女性たちには、その時代にあつて古い価値観に囚われずに自由に生きようとする「新しい女性」を見ることができるのである。これはつまり、一九二〇年代アメリカを代表する女性を描こうとした時、フッツジェラルドは先輩作家ジェイムズの描いたデ이지ーのイメージを彼の人物に重ねたのだ、と考えていいのかもしれない。やはり、フィッツジェラルドが直接的にジェイムズを知らなかったとしても、彼が偉大なる先輩から何らかの影響を受けているのではないかと思わずにはいられない。ならば、この二人を読み比べてみよう。学生たちはどう思うだろうか。そこで、『デ이지ー・ミラー』と『グレート・ギャツビー』が選ばれたのである。

『デ이지ー・ミラー』の教室へ

「……、よく分からない……」今週も聞こえてくる学生たちのつぶやき。初期の作品とはいえ、やはりヘンリー・ジェイムズは難しい。学生たちは、毎週与えられたページを読んでくるよう指示されているのだが、自分一人で読んでも分からないらしい。ならば、訳本を片手に読んでみてはと提案してみたが、今度は「訳本が何を言っているのか分からない……」らしい。

『デ이지ー・ミラー』のストーリーは単純だ。大富豪のアメリカ娘がヨーロッパにやってきて、文化や歴史のみならずその社交生活も楽しむようにするのが、彼女の気後れしない堂々たる姿勢はヨーロッパ人の気質に合わず、やがて彼女は理解されないまま社交界から追い出されていく。そんな彼女に恋心を抱きながら見守っている男ウインターボーンがいるのだが、実は彼はアメリカ人で長くヨーロッパに住んでいるという両側の視点を持つ人物。この彼が、ヨーロッパの価値観からデ이지ーを評し、アメリカ人娘の持つ無邪気さに惹かれていくのである。まさに、

「ヨーロッパの視点」と「アメリカの視点」から物語を描くという、ヘンリー・ジェイムズの十八番と言える設定のもとに、物語は進んでいく。だからこそ、『デ이지ー・ミラー』を読む際にも、これら両側の視点を意識すれば学生たちも読みやすいのではないか、そう思っていた。が、私の思惑は、見事外れたのだった。ジェイムズの情景描写は美しく、読者は登場人物たちの心のつぶやきに耳を傾けるうちに、知らずして彼らの意識に自分を重ね合わせししまう。しかし、学生たちにはそうならないのだ。まず「単語が難しい」とのこと。では、大きな辞書を使ってください。次に「一文が長過ぎる」とのこと。一気に全文をつなげて後ろから訳せようとせず、途中で切って読んでみてください。そして「話がちつとも進まない」とのこと。登場人物の動きばかりを追おうとせず、主人公の心のつぶやきに耳を傾けてください。それでもダメですか。

教室の中に、男子学生が一人いた。『デ이지ー・ミラー』がウインターボーンの視点で書かれていたからこそ、私はこの男子学生の読みに期待していた。女子学生に混じり、ウインターボーンの複雑なデ이지ーへの思いをどう読み解くか、おそらく女子学生たちも興味を抱いていただろう。しかし彼は、就活という理由で欠席を重ね、ほとんど内容が理解できていないために、いつも教室では全く口を開かなかった。

『グレート・ギャツビー』の教室へ

「先生、はまりました！」おつ、いいね、この反応。『グレート・ギャツビー』の評判は上々であった。文学のゼミにしては、半数以上が男子学生という珍しいクラスだった。しかも彼らの元気がいい。では彼らに、ギャツビーという男のロマンを、しっかりと味わってもらおうか。

『グレート・ギャツビー』の第一章は難しい。しかしここを乗り越えようと、ストーリーが次々に展開を見せるので、読むのは比較的楽になって

くる。もちろん単語は難しく、決して読むのに簡単な英語ではないのだが、しかし物語が明快で分かりやすい。『グレート・ギャツビー』は、語り手ニックの視線から、かつての恋人デイジーを取り戻そうとするギャツビーの姿が語られるという形で進む。ひとかどの人物となるべく、野心に燃えるギャツビーが、その未来図を大きく描き変えざるを得なくなるのは、デイジーとの出会いからである。彼の未来への軌道を大きく変えたデイジーが、しかし彼の元からいなくなった時、ギャツビーは未来へ進むことができなくなる。だからこそ、彼にはデイジーを取り戻す必要があり、そのために彼女に見合うだけの財力を身につけて、彼女の元に帰ってくるのである。しかし、ギャツビーのデイジーへの思いは完全な一方通行であり、彼女の彼への思いとは大きな違いがあることが、やがて明らかになる。

男子学生も女子学生も、大いにこの話を楽しんだ。読み進めるにつれ、「なんでこんなこと!」「ひどい!」「うそ!」と、面白いように反応が返ってくる。男子学生は、ギャツビーの純愛に自分を重ね、女子学生はギャツビーの一途な想いに胸ときめかせデイジーに冷たい視線を送った。この興奮は、フィッツジェラルドの英文を読む難しさをかき消した。

また、物語の設定も学生の興味をかきたてた。一九二〇年代にアメリカを大きく変えることとなる空前の好景気は、社会的にも文化的にも、様々なものを人々にもたらした。ボブカットの髪型に膝丈のスカートの闊歩する女性たち、豪邸と高級車を所有しプライベートビーチからモーターボートを楽しむ金持ちたち。彼らは週末になると、ロールスロイスでギャツビーの屋敷にやってきて、一晩中浴びるほどにお酒を飲んでパーティーを楽しむ。この華やかさ、鮮やかさ、活気溢れる情景は、学生たちの目をも釘付けにした。彼らはインターネットで画像を探し、また映画を見ることで実写化して、ギャツビーの世界に大いに酔いしれた。

授業を終えて

ジェイムズとフィッツジェラルド、学生たちの反応の違いはどこから生まれるのだろうか。どちらも、語り手である人物が主人公を見守っているという設定に変わりはなく、ストーリー自体の難しさも同程度である。しかし学生たちの読後感は、ジェイムズの「難しかった……」に対し、フィッツジェラルドは「楽しかった!」である。

学生たちの反応から気づいたことは、『デイジー・ミラー』と『グレート・ギャツビー』では、学生たちの読みのベクトルが違うということだ。前者の場合は、主人公デイジーを知ろうとすればするほど、私たちは語り手ウインターボーンをつぶやきの中に入っていく。心理主義作家ジェイムズの得意とする、巧みな心理描写の中に読者はどんどんと埋没するのである。しかし『グレート・ギャツビー』の場合は、語り手ニックとともにギャツビーを知れば知るほど、私たちは一九二〇年代アメリカの社会事情や文化事情への理解を深めていく。ギャツビーは時代の好景気もたらした金の力と豪華な生活を体現し、また、無一文から大富豪に成り上がった彼の姿は「アメリカン・ドリーム」を体現する。つまり読者はギャツビーを追求すると、彼を取り囲む社会や文化への理解を広げることになるのである。こう考えた時、『デイジー・ミラー』は内へ向かうのに対し、『グレート・ギャツビー』は外に広がると言えるのではないか。ここにこれら二作品の違いを見いだすことができ、これが学生たちの反応の違いの原因なのかも知れないと感じるのである。人間の内面を掘り下げるより、文化や社会への見地を広げる方が、学生たちには楽しいらしい。

その後

正直言うと、この後ゼミで『デイジー・ミラー』を読むことをためらうようになった。実際、二〇〇七年度以来、一度もゼミでは読んでいない。一方、これ以降も『グレート・ギャツビー』は二、三年おきに繰り返し読んでいる。毎回学生からの反応はよく、しかも不思議と、『グレート・ギャツビー』を読む年度は、男子学生の多いゼミになる。やはり学生には読みやすいのだ。それはつまり、教師にとっても授業のテキストとしては使いやすい作品となる。しばらくの立ち直り期間を経て、二〇一六年度、もう一度ヘンリー・ジェイムズをゼミで読んでみようと思った。今度もまた、英語の読みやすさを考えて、初期の作品から『ワシントン・スクエア』を選んだ。男子学生は二人、またおとなしくあまり発言がない。やはり、ジェイムズは受け入れられないのか。

しかし、不思議なことが一つある。ヘンリー・ジェイムズ作品を読んだゼミからは、卒論執筆を希望する学生が現れるのだ。『デイジー・ミラー』を読んだゼミから二人、そして『ワシントン・スクエア』のゼミからも二人、文学研究に興味を抱き、選択科目である「卒業論文」に挑もうという、なんとも頼もしい学生が現れたのである。ところが、『グレート・ギャツビー』のゼミからは卒論を書くという学生は現れない。これまですでに四度、ゼミでこの作品を取り上げたのだが、誰も文学研究に興味を示してくれなかった。この違いはなぜなのか。文学研究とは一体何なのか。二〇一八年度、再びこの二人の大作家の作品を、私はゼミで読んでみようと思っている。

(はんふりー けいこ)